

OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

C	O	N	T	E	N	T	S
図書館随想〔東郁郎〕	—	—	—	—	—	—	2
万年筆の魔力〔勝岡洋治〕	—	—	—	—	—	—	3
貴方がパパと断言できますか?〔鈴木廣一〕	—	—	—	—	—	—	4
心に残る夏〔小林望美〕	—	—	—	—	—	—	6
Online Journalの利用について〔茂幾周治〕	—	—	—	—	—	—	7
他大学図書館訪問記(2)(大阪歯学大学図書館の巻)	—	—	—	—	—	—	10
書評「診断名サイコパス;身近にひそむ異常人格者たち」〔山崎隆司〕	—	—	—	—	—	—	11
第4回医学図書館員基礎研修会に参加して〔松本玲子〕	—	—	—	—	—	—	12
本学教職員等著作寄贈	—	—	—	—	—	—	13
お知らせ	—	—	—	—	—	—	14
図書館業務日誌	—	—	—	—	—	—	15
編集後記	—	—	—	—	—	—	15



T. K.

図書館随想

東 郁 郎



思い出すままに図書館についての印象を少々ノスタルジックに綴ってみたい。

1. 府立中之島図書館

私の中学時代は戦時中の学徒勤労動員として、満足な授業は1年目だけで、2学年（昭和19年）になると動員の合間だけに通学し、農耕作業や防空壕掘り、線路傍の家屋の取壊し、時には本土決戦に備えて海南（和歌山県）の山腹へ堅穴壕掘りに出向したり、命ぜられるままにクラス単位で動いた。3学年になると、桜島、桜ノ宮の軍需工場の雑役に従事して、何回かの空爆に命拾いし終戦を廃墟の中で迎えた。その秋から授業が再開されたとはいえ、速やかに改訂された教科書、荒んだ師弟関係、陸軍幼年学校から復帰した同級生、しばりつけていた規律の開放の中で、満足な授業は少なく、その上、停電が相次いだ。何人かの友人と私は大阪府立中之島図書館を利用することにしたが、ここだけは停電がなかったのである。この時は図書を借りて読むというよりも、電燈の傘に黒布をかけないで堂々と照らして勉強できることの有難さが忘れられなかった。

2. 大高図書館

自由な空気の旧制高校に入学（昭22）して、弊衣破帽、黒マントの青春時代を3年間送った。勿論、窮乏生活で闇市と食糧配給制の併立した苦しい戦後社会であったが、自由を満喫し、学問には飢えたハングリー精神でぶつかった気がする。初めて習った独逸語、微積分、萬葉集、憲法など……何もかもが新鮮で楽しかった。牧歌的で、授業担当の先生が来ない時には近くの官舎まで学生が呼びに行く。ひもが2階からぶらさがっていて、「御用のお方は引張って下さい」と書いてあった。学生が先生を起こして授業して貰うという今では考えられない情景であった。図書館は2階立ての潇洒な木造建築で、好きな読書が自由にできた。居眠りしたり、運動場に出て芝生に寝ころんで読むこともあった。當にこの世のパラダイスであり、お金はなくても時間があつた。

学生時代という歌（平岡精二作詞・作曲）をペギー・葉山が歌っているが、～秋の日の図書館のノートとインクの匂い、枯葉の散る窓辺 学生時代～そのまま青春の大高図書館であった。

3. GHQ 図書館

大阪大学医学部に入って、学生時代は余り図書館の思い出がない。印象深いのは大学院時代で、眼科の研究室で、外国文献といえばサンケイ会館にあったGHQの図書館を利用した。何しろ最新刊が大学図書館より早く見られるのである。当時はコピーなどなかったので、必要な頁を書き写すのが日課であったが、どれだけ恩恵を蒙ったか測り知れない。戦勝国として米国は食糧援助や農地改革など色々の民主主義政策を敗戦国の日本に行った。科学情報の輸出は、あまり知られていないが日本の戦後復興の大きな原動力になったと思う。

4. 大阪医大図書館

この素晴らしい図書館は本学の誇りであろう。平成8年には日本眼科学会が創立百周年を迎えたので記念行事の一環として各大学眼科学教室の歴史や専門学会の活動を記録に留めた。また平成9年には日本コンタクトレンズ学会が、四十周年を迎えたので、その沿革を調べる必要に迫られた。図書館がどんなに役立ったかいうまでもない。記録が残されているというのは有難いことで、順序立てて読むと手に取るように状況が分かってくる。

図書館の値打ちは決して在庫図書の数ではなくて、良書をどれだけ集めているかであろう。図書の値打ちを知る見識のある人の総合力であり、その積み上げであろう。

今日、氾濫する情報、印刷物、コピーなどの保管・処理は大問題であるが、健康にとって大切なものが、バランスのとれた栄養、適度の運動、そして十分な休養といわれるように将来を望んだ運営が今後増々大切になると思われる。

（あずま・いくお 看護専門学校長、眼科学教授）

万年筆の魔力

勝岡洋治

私達はいつ頃から筆記用具、とくに万年筆信仰を捨ててしまったのだろうか。勉学に勤しむ学生達の多くが鉛筆を使っているのは昔も今も変わらないようであるが、一般社会ではボールペンが使われ、公式文書の記載にもボールペンの使用が義務づけられている。何枚つづりかの複写用の書類ではボールペンが威力を発揮し、万年筆では全く役に立たない。また、原本より謄写するにも万年筆で書かれたものでは鮮明度に欠けることになる。ファクシミリの原稿を送信する場合も同じことがいえる。

しかし、昔から日本人の中には筆記具に感情をこめる習慣があり、万年筆もその対象であった。私の記憶でも中学、高校の入学のお祝いには親や親戚の者から万年筆をもらった。自分の小遣銭が自由になった時には、文房具屋でいろいろと筆記用具を物色するのを楽しみにしていた。その中で万年筆が一番の興味を引くもので、それらの銘柄をあれこれ品評し、気に入ったものは学生服のポケットに後生大事に忍ばせていた。いまでも中学、高校時代に用いた教科書、受験参考書、単行本、文庫本のいくつかが手元に残っているが、それらの表紙の裏には氏名や住所、学校名、購入日、読了日などがその時期に持ち合わせていた万年筆で記入されている。

さて、もの書きを職業とする文士達は万年筆愛用者が多いと聞くがどうであろうか。ドイツ文学者で横綱審議会委員長でもあった高橋義孝氏は生来の文具好きであることを自他共に認めており、ボールペンで書かれた文字はいかにも軽薄で味気がないと言っている。氏は一つの万年筆（英国製、オノト）を三十年以上も使い続けていたとのことである。作家の池波正太郎氏は、「男の作法」の中で、一万年筆とかボール



(写真(右)前神戸大医学部部長 岡本彰祐先生
慶應義塾大学同窓会関西支部総会の席上で)

ペンとかサインペン、そういうものは若い人でも高級なものを持ったほうが、そりゃあ立派に見えるね。万年筆だけはいくら高級なものを持っていてもいい。(中略)本当の万年筆として立派な機能を持った万年筆はやっぱり高い訳だから、そういうものを持っていることは若い人でもかえって立派に見える一と万年筆を男の武器にみたてて、心構えを説いている。また、菊地寛も同じようなことを言っている。一昔の武士は腰の業物を競ったものだ。身装は質素を通り越しても薄汚くても、少なくとも古刀の名のある一腰を帯しているのが自慢だった。それと同様、文学者は良いペンを持たなくちゃならない。一池波氏や菊地氏の『万年筆、これ武士の刀』説などは、武士は食わぬど高楊枝のやせがまんに似て今日の豊かな社会では冷笑を買いそうであるが、文学者一流のきどりであろう。もっとも古来すべての文明紳士が万年筆を好んだ訳ではなく、丸善の図書顧問だった内田魯庵から万年筆を一本贈られた明治の文豪、夏目漱石は一ブリュー・ブラックのを使えば帳面をつけているような気がする一との理由で馴染まなかったようだ。万年筆信仰の系譜について言及した多摩美大の西尾忠久氏の書いたものの中で、明治末頃の万年筆の印象を草した文章が紹介されている。

一近時、万年筆がわが国のいろんなところで歓迎されているのは一時期の流行ではない。使用者がその効能の多いのに執着して、二度とこれを手ばなすのはむしろ苦痛と感じているからであると

ともに、万年筆を実見した同好の紳士淑女に波及して、その需要がましているからにはほかならない。そもそも文明的器具に備わっていないとすればならない資格は四つある。いわく、便利であること、いわく、経済的であること、いわく、実用的であること、いわく、高尚であること。(略) ーといった具合である。これら四つの条件の中で高尚という点を除けば、ボールペンは万年筆をはるかに凌駕する今日の文明用具といえる。

私の場合、いつの頃か万年筆を全く使わなくなった。職場では勿論のこと、自宅にも使用可能な万年筆を見つけることができないし、さらに私の周辺をみても万年筆愛用者を探すのが困難である。私を含めてものを書く機会の多い人達であるが、皆がボールペンを使用している。最近では日本語ワープロが流行しているが、私達は長年、紙面に文字を埋めながら思考することに慣れてきたので、ワープロを用いて文章を構成するには、思考過程を根本から変えなければならない。しかし、そんな心配を尻目に、ワープロ業界は量産をつづけている。今日、日本語ワープロは欧米の人達にとってのタイプライターと同じ様な存在になっている。

手書きで長文をものにするためには書き味が重視され、握り具合が吟味され、書き手の使用感が有り難がられた時代には万年筆はその条件を満たしてくれたが、合理性のみが重要視される今日の風潮からすれば、筆記用具に頓着せず、即物的なものになっているようである。

ところで、本学の教授就任のお祝いにと知人や友人より何本かの万年筆をプレゼントされた。形も太さも異なる一本一本を手にして久しく忘れかけていたものへの懐かしさと感触を楽しんでいる。そして、生来の悪筆にも躍動感と一種独特な味わいを与えてくれるような気がするのには錯覚であろうか。否、それが万年筆のもつ魔力なのであろう。

(かつおか・ようじ 泌尿器科学教授)

貴方がパパと断言できますか？

鈴木 廣一

「龍太郎、はい、口をあけて、あーん、痛くないからね。」と、コンピューター関係の外資系会社に勤務する冬彦は3歳になる長男の口の中に綿棒を入れて、頬の内側あたりを注意深くこすった。ほんとうにこれで検査できるのかな、と未だ半信半疑であったが、わずかな血痕から犯人が特定されたというニュースを幾度か見て決心したことを思い出し、望まない結果が出たときのことは頭の外にひとまず追い出した。この綿棒を息子の名前を書いた清潔なプラスチックチューブに入れ、栓をして、自分の綿棒を入れたチューブとともに返信用封筒に放り込んだ。”

『貴方がパパと断言できますか？ 誰にも知られずだ液でDNA鑑定ができます。』というコピーをご存じですか。アメリカのあるベンチャー企業が、DNA鑑定を商業ベースで請け負うことを宣伝しているキャッチフレーズです。ある週刊誌に最近載っているのをみかけました。DNAテクノロジーが生命科学研究の中心的方法となるまでは、週刊誌の広告に、自分の子が本当に自分のゲノムを受け継いでいるかお調べになりませんか、といわんばかりの文句が掲載されようとは、想像もできませんでした。このようなことが現実になったことには、PCR法、正式にはPolymerase Chain

Reaction法の開発がそのベースにあるといえます。この方法はご存じのように、これまたベンチャー企業のシータス社の一研究員であったマリス博士が週末に、ガールフレンドと夜の山道をドライブ中に思いついたという革命的な方法です。開発にまつわるこの話を日経サイエンスのマリス博士自身の記事で読んだとき、ガールフレンドと夜道をドライブさせてくれたら、ストックホルムのパーティに連れて行ってやれるかもしれない、あの大きなアイスクリーム（利根川博士のノーベル賞受賞時の中継で、おいしそうな特大アイスクリームがあったように記憶しています）が食べられるよ！、と妻に言ったことがあります。PCR法は開発されてからはや10年の歳月が過ぎ、純粹の科学研究の場だけでなく、司法の場においてもなくてはならない技術になりました。

PCR法の開発の数年前に英国レスター大学のジェフリー博士がDNAフィンガープリント法を開発しています。この“^{フィンガープリント}指紋”というネーミングと司法の場への応用成功例によって、DNA鑑定はひろくマスコミにとりあげられるようになり、さらにPCR法がブースターとなって、一時のブームに終わらず、折あるごとに何度も繰り返して世間喧伝されました。その結果、髪の毛から親子の鑑定ができるでしょ、やっていただけませんか、とか、唾液から本当に自分の子かどうか調べてもらえませんか、という問い合わせが増えました。髪の毛からできないかときいてくるのは、相手に知られずに、という含みがあるわけです。問い合わせしてくるのは男性であったり、その母親であったり、また女性であったりします。女性の場合は、結婚した前後や、子どもを妊娠した前後に夫以外の男性と関係があったので、どちらの子か自分でもわからない、ということが理由である場合がほとんどです。大抵の問い合わせは、何かの商品について、その効能、値段、購入する方法などを問い合わせるとまったく変わらない感覚です。（さすがに年配の母親らしい人は、どことなく世間をはばかり尋ねられますが。）もし自分の子や夫の子でないことがわかったらどうするつもりなのでしょう。子の戸籍や養育やその他いろいろな法的関係が激変するということが大いにあり得るのに、誰の精子が入ったのかという何とも即物的な事実を明らかにするほうが大事なのではないでしょうか。

戦場の兵士が認識票というものを身につけているのを映画などで観たことがありますが、それを遺伝情報で表記することが可能な時代になっています。ゲノムのなかにある、個体ごとにバリエーションの多い部分をいくつか検査して、それを数字なり、バーコードなりでデジタル情報として身体のどこか、例えば歯に刻印する、ということも可能です。『お子さまに将来、確実に年金が支給されるようにすぐにゲノム検査を。それは親の義務です。政府公報』などというポスターが産科の待合室に掲示してあったりすると、身に覚えがあれば、うかうか産科でお産もできなくなります。欧米ではDNA鑑定は早くから取り入れられ、刑事事件はもちろん、民事事件でも多数の事例に使われています。何事もシロクロははっきりさせるという欧米人の気質にはデジタルになじむ遺伝情報は受け入れやすいでしょうが、ファジーでしておくのが得意な我々にはなじみにくい点多々あると思います。知らずにおくというのも人生のひとつの知恵なのでは。

冬彦は結局、検査結果の受け取りを拒否し、第2子のみごもっている妻と長男の龍太郎とともに幸せに暮らしているそうです。

（すずき・こういち 法医学教授）

著者申し出につき PDF 版削除

Online Journal の 利 用 に つ い て

茂 幾 周 治

最近インターネットの急速な普及により、インターネットを利用して、必要な情報を入手する方法が増えてきている。今回は、最近特に関心を持たれているOnline Journalの利用について述べてみたい。

MaruzenとKinokuniyaから最近Electronic Journals Catalogが出された。Maruzenのcatalogの説明によると、「電子ジャーナル」とは、インターネットを通じて既存の冊子体の雑誌を電子的に提供するものです。また最近では既存の雑誌だけではなく、インターネットだけで提供されるものも出始めているとのことである。そして、「電子ジャーナル」の正しい呼び方は、「Online Journal」というより「Electronic Journal」と呼ぶことが多いとのことである。しかし、ここではOnline Journalと呼ぶことにしたい。

Maruzenのcatalogの説明を参考にOnline Journalについて、もう少し説明してみよう。

1. 「電子ジャーナル」の提供者は誰か？

以下の三つのケースがある。

- 1) 冊子体と同様に各出版社が自社のWeb上で提供している場合。
- 2) 専門業者が出版社と契約して提供している場合。
- 3) Maruzenのような取次店が特定の出版社の電子ジャーナルを提供している場合。

2. 「電子ジャーナル」の特徴は？

本文へのアクセスは各出版社により異なるが、Contentsのみ、Abstractsまで、Full Textまでと出版社との契約の内容により、アクセス内容が異なる。

3. 「電子ジャーナル」の提供方法は？

現状では多くの場合、冊子体の購読者には無料か、又は冊子体の価格の20-25%の追加料金で提供されている。

以上が「電子ジャーナル」の概略である。

次に本学が学内利用者に提供しているOnline JournalのTitleと具体的アクセス例を紹介しよう。

Online Journalについては、図書館のHome PageのLibraries & Journalsのメニューにアクセスすると利用できます。以下に本学で利用可能なTitleを挙げます。

- 1) American Journal of Nursing
- 2) Annals of Thoracic Surgery
- 3) Biochemical Journal
- 4) British Journal of Radiology
- 5) J. of American College of Cardiology
- 6) J. of Biological Chemistry
- 7) J. of Clinical Investigation
- 8) J. of Molecular Biology
- 9) The lancet
- 10) Nucleic Acids Research
- 11) Physics in Medicine and Biology
- 12) Pro Natl Acad Sci USA
- 13) Protein Science
- 14) Springer-Verlag LINK誌の Annals of Hematology 他15誌

以上合計28誌です。

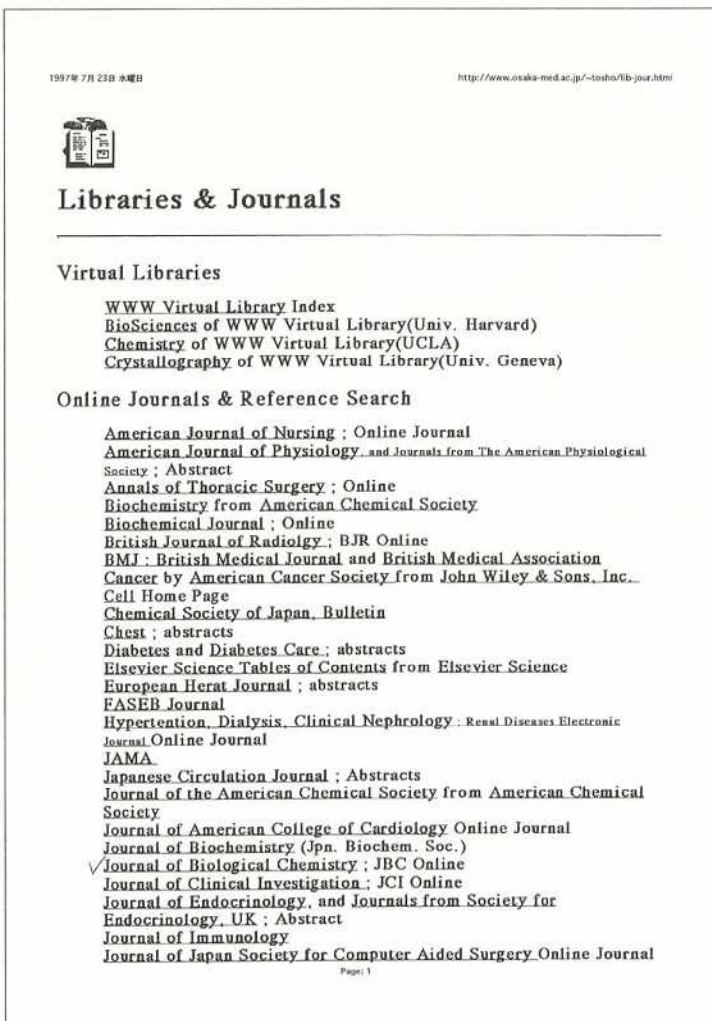
これらのOnline Journalは雑誌によりContentsまでのもの、Abstractsまでのもの、Full Textまでアクセスできるものといろいろあります。そして、殆どの雑誌は冊子体を購入しておれば、一定期

間無料で利用可能なものですが、一部有料なものもあります。また、一部データ（sample誌、最新号等）のみ利用可能なものがあります。

次に実際のOnline Journal（Journal of Biological Chemistry）の利用例を説明しよう。

本学図書館のHome PageからLibraries & Journalsのメニューをクリックすると図1の様なりストが表示される。次にJournal of Biological Chemistryをクリックすると図2の様にJournal of Biological ChemistryのHome Pageが表示される。Current Issueをクリックすると、図3の様に最新号のtable of contentsが表示される。contentsの中のCell Biology and Metabolismを選択し、clickすると図4の様画面が表示される。最後に論文単位に[Abstract]か[Full Text]をクリックすると、必要な情報が

図1 入手できる。



Online Journal利用の手続きについて

利用手続きは、図書館で冊子の雑誌を購入しておれば、それぞれのpublisherにインターネットを利用してOnline登録をする。許可がおりれば、passwordがpublisherから送られてくる。その後各publisherのHome Pageにアクセスして利用出来るようになる。

Online Journalのメリットと問題点

[メリット]

- (1)キャンパス内のどこからでも、いつでも、許可された利用者はアクセス出来る。
- (2)情報が冊子体に比べて、二週間から一ヵ月早い。(速報性)
- (3)検索機能があり、必要な論文が入手し易い。
- (4)外部データとのリンクが出来る。(発展性)
- (5)書架スペースの節約になる。
- (6)未着、欠号がない。

[問題点]

- (1)利用時間帯により、アクセスに時間がかかる。
- (2)Back issue(過去のデータ)の入手が保障されない。
- (3)無料利用期間が何時までも保障されない。
- (4)Online Journalは冊子体より安くはならない。
- (5)出版社が潰れた場合、情報の保障がない。

1997年7月24日 本曜日 <http://www.jbc.org>

PUBLISHED BY THE AMERICAN SOCIETY FOR BIOCHEMISTRY AND MOLECULAR BIOLOGY

Journal of Biological Chemistry

NEW URL www.jbc.org IS EASIER TO TYPE AND REMEMBER

NEW for Members

View or Search Archive | Current Issue | View Future Titles

6 January 1995 - 18 July 1997 | 18 July 1997 (Next: July 25) | 25 July 1997 - 1 August 1997

MEMBERSHIP IN | FREE ONLINE ISSUE

INST. TO AUTHORS | EDITORIAL BOARD | RELATED RESOURCES

How to Subscribe to JBC Online | SEARCH | Mini-review Compendium

The Journal of Biological Chemistry is published by the American Society for Biochemistry and Molecular Biology.

The Journal of Biological Chemistry Online is co-published with Stanford University's HighWire Press™.

© 1997 by The American Society for Biochemistry and Molecular Biology, Inc. ISSN 1083-351X

1997年7月24日 本曜日 <http://www.jbc.org/current/abstr>

Victoria L. Stevens and Jianhua Tang
Fumonisin B₁-induced Sphingolipid Depletion Inhibits Vitamin Uptake via the Glicosylphosphatidylinositol-anchored Folate Receptor
 1997 272: 18026-18025. [Abstract] [Full Text]

Xiao-Hui Wang, Ken-ichi Nakayama, Yoh-ichi Shimma, Atsushi Tanaka, and Yoshifumi Jigami
MNNG, a Member of the KRE2/MNT1 Family, Is the Gene for Mannosylphosphate Transfer in *Saccharomyces cerevisiae*
 1997 272: 18117-18124. [Abstract] [Full Text]

Cell Biology and Metabolism

Bas-jan M. van der Leede, Christina E. van den Brink, Wilhelmus W.A.M. Pijnappel, Edwin Sonneveld, Paul T. van der Saag, and Bart van der Burg
Autoinduction of Retinoic Acid Metabolism to Polar Derivatives with Decreased Biological Activity in Retinoic Acid-sensitive, but Not in Retinoic Acid-resistant Human Breast Cancer Cells
 1997 272: 17921-17928. [Abstract] [Full Text]

Paul Waring, Tahira Khan, and Allan Sjaarda
Apoptosis Induced by Gliotoxin Is Preceded by Phosphorylation of Histone H3 and Enhanced Sensitivity of Chromatin to Nuclease Digestion
 1997 272: 17929-17936. [Abstract] [Full Text]

Béatrice Antoine, Anne-Marie Lefrançois-Martinez, Gilles Le Guillou, Armelle Létourneau, Alain Vandewalle, and Axel Kahn
Role of the GLUT 2/Glucose Transporter in the Response of the L-type Pyruvate Kinase Gene to Glucose in Liver-derived Cells
 1997 272: 17937-17943. [Abstract] [Full Text]

Fiona Watson, Lakhdar Gasmî, and Steven W. Edwards
Stimulation of Intracellular Ca²⁺ Levels in Human Neutrophils by Soluble Immune Complexes. FUNCTIONAL ACTIVATION OF FcγRIIb DURING PRIMING
 1997 272: 17944-17951. [Abstract] [Full Text]

Patrick M. Sullivan, Hafid Mezdoor, Yasuaki Anstani, Chris Knouff, Jamila Najib, Robert L. Reddick, Steven H. Quarfordt, and Nobuyo Maeda
Targeted Replacement of the Mouse Apolipoprotein E Gene with the Common Human APOE3 Allele Enhances Diet-induced Hypercholesterolemia and Atherosclerosis
 1997 272: 17972-17980. [Abstract] [Full Text]

Colin A. Leech and Joel F. Habener
Insulinotropic Glucagon-like Peptide-1-mediated Activation of Non-selective Cation Currents in Insulinoma Cells Is Mimicked by Maitotoxin
 1997 272: 17987-17993. [Abstract] [Full Text]

Suofu Qin, Yasuhiro Minami, Tomohiro Kurosaki, and Hirohei Yamamura
Distinctive Functions of Syk and Lyn in Mediating Osmotic Stress- and Ultraviolet C Irradiation-induced Apoptosis in Chicken B Cells
 1997 272: 17994-17999. [Abstract] [Full Text]

Malcolm Lyon, Graham Rushton, and John T. Gallagher
The Interaction of the Transforming Growth Factor-β₃ with Heparin/Heparan
 Page: 2

1997年7月24日 本曜日 <http://www.jbc.org/current/abstr>

JBC Online

HOME | HELP | FEEDBACK | SUBSCRIPTIONS | ARCHIVE | SEARCH | TABLE OF CONTENTS

Taconic
 Quality Laboratory Animals and Services for Research

Table of Contents: 18 July 1997; 272 (29) [Index by Author]

- Mini-Reviews
- Communications
- Carbohydrates, Lipids, and Other Natural Products
- Cell Biology and Metabolism
- Enzymology
- Membranes and Bioenergetics
- Nucleic Acids, Protein Synthesis, and Molecular Genetics
- Protein Chemistry and Structure

Find articles in this issue containing these words:
 [Search All Issues]

To see an article, click its [Full Text] link. To review many abstracts, check the boxes to the left of the titles you want, and click the 'Get All Checked Abstracts' button. To see one abstract at a time, click its [Abstract] link.

Mini-Reviews

Diana M. Stafforini, Thomas M. McIntyre, Guy A. Zimmerman, and Stephen M. Prescott
Platelet-activating Factor Acetylhydrolases
 1997 272: 17895-17898. [Full Text]

Communications

Scott D. Briggs, Mark Sharkey, Mario Stevenson, and Thomas E. Smithgall
SH3-mediated Hck Tyrosine Kinase Activation and Fibroblast Transformation by the Nef Protein of HIV-1
 1997 272: 17899-17902. [Abstract] [Full Text]

Sean W. Jordan and John E. Cronan Jr.
A New Metabolic Link. THE ACYL CARRIER PROTEIN OF LIPID SYNTHESIS DONATES LIPOIC ACID TO THE PYRUVATE DEHYDROGENASE COMPLEX IN *ESCHERICHIA COLI* AND MITOCHONDRIA
 1997 272: 17903-17906. [Abstract] [Full Text]

Carbohydrates, Lipids, and Other Natural Products

Page: 1

今後の課題

Online Journalを本格的に利用するためには、各社が提供するサービスについて、どのサービスを選択するかを利用目的、利用環境を考えて選択する必要がある。そして、各大学にあった総合化された、利用環境を如何に構築するかが課題である。

1997年における「電子ジャーナル」の現状は、「嵐の前の静けさから嵐の前兆へ」と言われている。いずれにしても今後の動向を注目していく必要があるだろう。

(もぎ・しゅうじ 図書館課長代理)

大阪歯科大学は、大阪府中央区天満橋にキャンパスがありましたが、附属病院を残し、1997年5月に枚方市樟葉に移転して来られました。枚方市牧野にもグラウンドがあります。

京阪電車樟葉駅から徒歩約5分のところに真新しいキャンパスがあります。以前の天満橋キャン



キャンパス中央にある図書館(右側)

パスは診療部門とし、こちらの樟葉学舎は、教育・研究部門となっています。

正門をに入って右手4階建ての4号館2階から4階が図書館となっています。

面積は、2,748m²で収容可能冊数は171,850冊。現蔵書数は87,000冊、受入雑誌タイトルは1,040タイトル、新聞20誌です。他に天満橋分室357m²、牧野分室506m²があります。天満橋分室とは専用回線で結ばれています。

図書館の入口は、2階でやはり入退館システムが導入されています。

2階部分は、入口すぐ右に新聞・一般雑誌等のブラウジングコーナーがあり、ゆったりとしたスペースとなっています。左手にカウンターがあり、続いて新着雑誌コーナー、参考図書と二次資料が配架されています。カウンター前の階段両側には、検索コーナーとして計8台の端末があり、学内向けHome PageからMEDLINE・医学中央雑誌の検索および図書館蔵書検索ができるようになっています。

3階部分は、歯学図書・一般図書・学生参考図書・歯学雑誌・1987年以降の医学和雑誌が配架されています。また、「種の起源」初版(1859年)やヴェサリウス「人体解剖図譜」第2版(1555年)等を所蔵する貴重図書室、および間仕切りの操作で1室としても使用できるグループ学習室が2室あります。中央部分には、LRC(Learning Resource Center)としてAVブース4席とインターネットやWord, Excelの利用ができるオープン端末が8台設置されています。端末は、本学同様よく利用されているそうです。

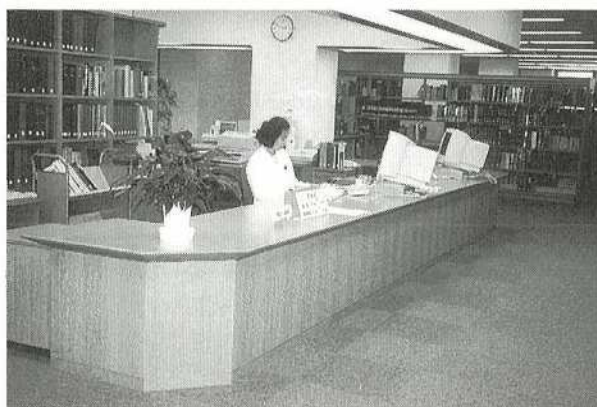
4階部分は、1986年以前の医学和・洋雑誌が電動集密書架に配架され、研究個室も3室あります。

各階には上記以外にも検索用端末およびコピーカードが利用できる複写機が1台ずつ設置されています。

本学においても、利用者の方々にとって使いやすい図書館システムとして、MEDLINEや蔵書検索の学内LANを介したインターネットによる利用も、今後の検討課題と思われますので、今回のシステムは興味あるものでした。

前回の大阪薬科大学図書館と同様に、大阪歯科大学図書館とも今まで以上の協力関係を築いていきたいと思っております。

(福広)



メイン・カウンター

書評

「診断名サイコパス——身近にひそむ異常人格者たち」
ロバート・D・ヘア著、小林宏明訳
早川書房、1995年（原書初版、1993）

山崎隆司



「この人間〔犯罪者〕は何なのか。病気の堆積である。この病気が精神によって世界につかみかかるのだ。世界で餌食を求めようとするのだ。／〔・・・〕／この貧しい肉体〔創造的生〕を見よ。この肉体の悩み且つ欲した所のものをこの貧しい魂は自己流に解釈したのだ。殺人の快樂と匕首の幸福への欲求として解釈したのだ。」

これはニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』からの引用である。冒頭いささかもものものしい引用をしたのは、我々は何事によらず指南されていること（orientation）が必要だと思ったからである。妻の財布にコンドームを見つけ、口論しているうちに逆上して

妻を殺した男（掲出書より）がいたとしたら、我々はこの男の行為を是認しないまでも、これに同情し共感することができる。しかし最近神戸市で起ったような犯罪を何の指南もなしに了解できるだろうか。このニーチェの「精神分析」は、フロイトの仮説が神経症の理解に寄与したように、この種の犯罪（掲出書に満載されている）の理解に少なくとも貴重なヒントを与えるのではないか。

さて、本題にはいると、邦訳の標題にある「サイコパス」（psychopath）は「精神病質者」のことで、「精神病質」（psychopathy）とは性格の強度の偏倚のために本人自身が苦しむか、或いは社会がそのために迷惑を蒙るものである。英米ではこの名称を主として後者に属する反社会的性格異常（社会的規範に順応できない性格）を指すのに用いる（村上仁）。訳者は症状名にだけ日本語を使っているようで、小文においてもこれに従う。

本書の著者のヘア博士はカナダのプリティッシュ・コロムビア大学教授。本書はサイコパスに関する専門的文献を門外の人にも「わかりやすく翻訳する」という意図で書いたという。フィクション（小説や映画）からも多くの引例がなされているのもそういう啓蒙書という趣旨にそうためであろう。内容についていえば、博士の開発した「精神病質チェックリスト」の「概要」の都合十二の人格特性（たとえば「口達者で皮相的」、「浅い感情」）についてそれぞれ症例乃至事例を挙げて解説を施すというのを骨子としている。

ヘア博士によると、サイコパスの最大の特徴は「もののみごとに良心が缺けている」ことである。（本書の原題は『無良心』。）それは彼等に「良心の湧き出づる泉である情緒反応——恐怖とか不安——を体験する素養がほとんどない」からである。あるサイコパスの殺人犯は数件の残酷な殺人および屍体切断について「まるで野球の話をしているように」微に入り細を穿って語り始めた。つとめて職業的無表情をよそおっていた面接者がついに嫌悪の情を示したとき、彼は話をやめた。つまり「感情が稀薄なので、自分の言ったことが相手に衝撃を与えたことを直感的に理解しなかったのだ」。彼等の情緒体験不能は「脳の働きを映し出すテクノロジー」によって実験的に証明されようとしているという。

精神病質の成因は依然として不明であるが、理論的には遺伝的かつ生物学的要因の所産とするも

の、幼時における缺陷のある社会的環境に起因すると見るものがあるが、真実はこの両端の中間にあるというのがヘア教授の立場である。しかしこうもいっている。「結局のところ、精神病質が幼い頃の社会的、あるいは環境的要因に直接基づいているとする確かな証拠はどこにも発見できない。」裕福で立派な家庭からも精神病質の子供が育つ。「私のどこがいけなかったのか？」そう自問する親の苦悩にも言葉が費されている。

現在北米には、教授によると、二百万人のサイコパスがいる。無論彼等がすべて犯罪者になるわけではないが、「刑務所にいる受刑者の20%の男女はサイコパスである。サイコパスは重大な犯罪の50%以上を占めている」。サイコパスの治療については博士はきわめて悲観的である。なぜならば、治療が成功するためにはまず患者が症状を自覚して治癒を願わなければならないのに、彼等は一般に「自分に満足していて、他人から見れば荒涼とした自己の内部のありようにも満足感をおぼえている」からである。

ヘア博士は、早くも1940年代中葉に米国の先覚者の一人が「サイコパスが社会の片隅、つまり『個人の自由という概念を謳歌でき、地域社会のチェックと管理が不十分で、肉体的にも心理的にも好き勝手ができる』ところによく見受けられると書いている」ことに注意を促している。「今日では、サイコパスはどこにでもいるように見える。」つまり社会の全域がサイコパスの「完璧な繁殖地」、彼等にとっての「殺戮の場」になってしまったというのである。この類比は甚だ示唆と暗示の力に富む。現在の日本はこうした事情に関して何十年代の米国に相当するのだろうか。——随所に、時節柄、いろいろのことを考えさせる良書であると思う。

(やまさき・たかし ドイツ語教授)

第4回医学図書館員基礎研修会に参加して

松本玲子

1997年8月6日(水)から8日(金)まで、奈良県立医科大学において開催されたこの研修会は、『医学図書館員としての必須基礎知識』をテーマに下記のようなプログラムで進められた。

第一日 JMLA(日本医学図書館協会)の活動と今後の展開

図書館業務の基礎知識2:雑誌の受入・目録

講演1「インターネットが医学・医療情報の流通に与える影響と医学図書館の今後」

(大阪医科大学中央検査部 山本 隆一氏)

図書館業務の基礎知識1:雑誌の選定・契約・発注

図書館業務の基礎知識3:図書の受入・分類・目録

図書館業務の基礎知識4:インターネットの使い方

第二日 講演2「高度知識情報化社会における医学図書館の役割」

(鳥取女子短期大学 宍道 勉氏)

講演3「総合型学術情報システムの構築に向けて」

(滋賀医科大学教務部図書課 白木 俊男氏)

図書館業務の基礎知識 5 : 二次資料—MEDLINE、Current Contentsの使い方
図書館業務の基礎知識 6 : 二次資料—医学中央雑誌、参考図書の使い方
図書館業務の基礎知識 7 : ILL (相互利用) 業務

第三日 演習：二次資料、インターネット実習

講演 4 「JMLAならびにMEDICAL LIBRARIANは高度知識情報化社会へ向けて、いかに対応していけばよいのか」

(奈良県立医科大学図書館 廣井 聰氏)

講義によって、日頃行っている業務の再確認ができ、他の図書館の様子も知ることができた。特に二次資料の使い方では、文献検索のテクニックを学んだ。本学図書館でも、看護学生や看護スタッフのCD-ROM版『医学中央雑誌』の利用が増えてきている。ただ、医学ということで看護文献が少ないのは事実で、思うような結果が得られないことがある。代わりに冊子体の『最新看護索引』等の二次資料を勧めることしかできず、力不足を感じていたが、今後は、キーワード設定のみならず、絞り込み機能を上手に使えるようアドバイスしていきたい。そのために利用者へのインタビューの力をつけなければと思った。

また、四つの講演は、高度知識情報化社会と図書館との関係が話されたものであった。医学図書館という特質からコンピュータは切り離せないものになっている。しかしそういう時だからこそ、人的ネットワーク、「人」が大切になると力説されたのが印象に残った。講演者の一人、白木氏は「Multimediaを情報として蓄積し、処理する最適なもの、Computerではなく、人間であり、図書館員でなければならない」とおっしゃっている。図書館員の質が問われているのである。このことを踏まえ、図書館サービスという点を考えながら業務に励みたいと思う。

(まつもと・れいこ 看護専門学校図書室)

本学教職員等著作寄贈

(平成9年4月～平成9年7月分)

麻酔科学教室

大阪医科大学麻酔科豊田住江先生定年退職記念集：業績および随想集

／豊田住江 大阪医科大学麻酔科ペインクリニック 1994

田中 忠彌 (本学理事長)

故・牧内正一先生追悼集／大阪医科大学眼科学教室 大阪医科大学眼科学教室 1988

リンパ系と神経系：電顕および免疫組織細胞化学的研究

／鈎スミ子 大阪医科大学解剖学第一講座 1991

武内敦郎 (本学名誉教授)

ふたつの心臓^{ハート}／武内敦郎 メディカ出版 1997



お知らせ



1. ニューメディア情報室について

〈新たにWindows95パソコンを2台、MOドライブ1台を追加〉

利用できるソフトはOffice95、Word97、クラリスワークス、一太郎7です。

また、従来からあるWindows95パソコンのうち1台をグレードアップし、新規導入機と同じぐらいの処理速度に向上しました。

〈デスクトップセキュリティ導入〉

各パソコンの環境を不用意に壊さないよう一定の操作を制限するセキュリティを備えました。セキュリティに関する説明は各パソコンのデスクトップに最新情報として載せています。

〈カウンターへの申請不要〉

今まで、利用の際はカウンターで利用申請が必要でしたが不要としました。代わりに各パソコンに利用状態とルールを載せた札を用意しています。それらの使い方は室内に掲示していますので、よく目を通した上、利用してください。

〈CD-ROMの利用方法を整備〉

ニューメディア情報室およびCD-ROM検索コーナーで利用できるCD-ROMについてCD-ROMの概要、どの端末・パソコンで利用できるか、起動方法を載せた参考資料（A4ファイル形式）を作成し、随時更新するようにしました。（同室内のキャビネットに配架）現在、約30タイトルのCD-ROMが利用できます。

2. インターネット専用端末の新設について

従来からのニューメディア情報室のインターネット接続パソコンに加えて、2階のOPAC端末台横にもインターネット専用端末を2台新設しました。図書館を利用できる方はどなたでも自由に利用できます。

利用時間：開館時刻より閉館30分前まで

3. 看護専門学校図書室

新規受入雑誌

研究集録（大阪市私立幼稚園連合会） 27（1997）＋

こころの看護学 1（1997）＋

ナーシングカレッジ 1（1997）＋

日本糖尿病教育・看護学会 1（1997）＋

老年看護学 1（1997）＋



図書館業務日誌

4月

- 3日(木) 新入職員図書館オリエンテーション(於、第7会議室)
- 9日(水) 看護専門学校新入生オリエンテーション(於、第一看護専門学校大研修室)
- 15日(火) 新入生図書館オリエンテーション(於、さわらぎキャンパス)
- 17日(木) 日本医学図書館協会理事会・評議員会(於、東邦大学医学部)
- 18日(金) 日本医学図書館協会企画・調査委員会(於、大阪医大)
- 23日(水) EBSCOセミナーに館員参加(於、フエイム新大阪)
- 24日(木) 平成9年度第1回図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 25日(金) 日本医学図書館協会資料保存委員会(於、大阪医大)

5月

- 9日(金) 日本医学図書館協会基礎研修会実行委員会(於、大阪ガーデンパレス)
- 15日(木) シンポジウム「3Aを目指す電子図書館」へ館員参加(於、けいはんなプラザ)
- 21日(水) -23日(金) 第68回日本医学図書館協会総会(於、旭川グランドホテル)
- 29日(木) 平成9年度第2回図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 30日(金) 次期図書館システム打合せ会(於、図書館会議室)

6月

- 4日(水) 日本医学図書館協会基礎研修会実行委員会(於、大阪ガーデンパレス)
- 5日(木) 滋賀医科大学職員が見学来館(二名)
- 19日(木) 英国立図書館文献複写センター(BLDSC) サービス説明会に館員が参加(於、大阪科学技術センター)

日本医学図書館協会理事会(於、東邦大学医学部)

- 24日(火) -25日(水) 丸善ライブラリーフェア('97セミナー)に館員参加(於、丸善大阪支店)
- 26日(木) 平成9年度第3回図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 27日(金) 日本医学図書館協会企画・調査委員会(於、奈良医大)

7月

- 2日(水) 第69回近畿地区医学図書館協議会例会(於、大阪市大)
- 4日(金) 日本医学図書館協会資料保存委員会(於、大阪医大)
- 11日(金) 日本医学図書館協会基礎研修会実行委員会(於、大阪ガーデンパレス)
- 15日(火) 日本医学図書館協会総務会(於、協会中央事務局)
- 16日(水) 大阪薬科大学図書館員が見学来館(三名)
- 24日(木) 大阪薬科大学図書館へ施設見学(館員二名)
- 29日(火) 紀伊国屋書店ジャーナルセミナーに館員参加(於、梅田スカイビル)

8月

- 4日(月) 次期図書館システム打合せ会(図書館会議室)
- 6日(水) -8日(金) 日本医学図書館協会基礎研修会(於、奈良医大)
- 18日(月) -22日(金) 開架図書蔵書点検
- 21日(木) 新潟大学附属図書館旭町分館館員が見学来館(二名)
- 25日(月) 台湾国立医科大学図書館員が視察のため来館(二名)
- 29日(金) 日本医学図書館協会企画・調査委員会(於、滋賀医科大学)

編 集 後 記

今回のトップ記事は、看護専門学校長の東先生に、勝岡先生と鈴木先生には、エッセイをお願いしました。前号から連載の他大学図書館施設見学は、今回は大阪歯科大学図書館の新館を訪問しました。その他の方も執筆に快くご協力頂きありがとうございました。

表紙のカットは恒例により北村達郎氏にお願いしました。OMNIBUSについての読者の方のご意見をどしどしお寄せください。(茂幾)

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報／大阪医科大学附属看護専門学校図書室報」

No.9 1997年9月30日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (0726) 83-1221 (代)

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社